名古屋学院大学論集　言語・文化篇　第22巻　第2号（2011年3月）

Beowulf 175行目以降のChristian Excursusにおける異教への言及について

船　井　純　平

古英詩*Beowulf*にはたびたび襲来するGrendelによってDeneの人々が苦しめられている様子が描写されており，それは次のように語られている。

Hwilum hie geheton　　æt hærgtrafum
wigweorþunga,　　wordum bædon
þæt him gastbona　　geoce gefremede
wið þeodþreaum.　　Swylc wæs þeaw hyra,
hæþenra hyht;　　helle gemundon
in modsefan,　　metod hie ne cuþon,
dæda demend,　　ne wiston hie drihten god,
ne hie huru heofena helm　　herian ne cuþon,
wuldres waldend.[1)]　　(*Beowulf*, ll. 175–83a)

At times they promised homage to idols in *hærgtrafum* and played in words that soul-slayer would provide help for them against the nation-distress. Such was their habit, heathen's hope; they thought about hell in their mind, they did not recognize God, the Judge of deeds; they did not know the Lord nor indeed were they able to praise the Protector of the heavens, the Ruler of glory.[2)]

この箇所は異教の習慣への言及としてしばしば研究者の注目を集めてきた。しかしながらこの詩におけるいくつかの異教への言及箇所と同様に，詩人が実際の異教の習慣について知識があったかどうかに関しては意見が一致していない。本稿では，この箇所における単語の使い方からこの問題について考察したい。

引用箇所は異教の習慣への直接的な言及として注目される一方で，'It is clear that the poet was entirely vague on the subject of either what environment his pagans used for worship or what they actually did'[3)] といったような詩人の異教の習慣に対する知識に懐疑的な意見や，「国難に遭って異教神崇拝に後退するデネ人の姿は詩人や聴衆の記憶にある祖先の姿でもあったのではないか。神を忘れた者を哀れみ，神を信じる者を祝福するこの箇所の後半は詩人が聖職者であることを窺わせる[4)]。」という解釈が提唱されている。該当箇所では確かに，異教の崇拝所あるいは偶像崇拝に関して実際にどのようなことをしていたかという記述は見られない。そのため，詩人は異教

に関して詳細な知識は持っていなかったという解釈がしばしばなされる傾向にある。このようにこの詩が成立した時代には異教の習慣は既に過去のものになっており，ここに見られる描写は異教時代の北欧という作品の背景に伴う単なる文学的表現であると考えるのが妥当かどうかを以下で見ていくことにする。

引用箇所では異教の崇拝場所がhærgtræfという単語で表現されている。初めにこの語の意味について考えてみたい。この複合語はいわゆるhapax legomenonであり，古英語の文献でこの箇所以外に用例がない。そのため，この単語の訳に関しては訳者や校訂者によって異なっており一致していない。

Howell D. Chickering: temples[5)]
R. K. Gordon: their temples[6)]
John Porter: idol-shrines[7)]
Wyatt and Chambers: idol-tent, heathen fane[8)]
C. L. Wrenn: tabernacle of an idol[9)]
F. R. Klaeber, Bruce Mitchel: heathen temple[10)]
J. Hoops: Gotzentempel[11)]
ASPR: idol-sanctuary?[12)]
S. A. J. Bradley: pagan shrines[13)]

上記のように，この複合語が一語で訳されている場合と，第一要素および第二要素それぞれに訳が与えられている場合がある。前者の場合，‘temple’または‘their temple’などとされている。一方後者の場合には，第一要素であるhærgは‘heathen, pagan’あるいは‘idol’と解釈されており，第二要素のtræfには‘temple’という訳語が与えられている場合が多いが，‘tabernacle, tent’としているものもある。

この複合語の第一要素は写本ではhrærgと綴られており，通常heargかあるいは写本の綴りにより近いhærgに修正されるが，この写字生の誤りは写本が書かれた時には既にこの語が理解できないものになっていた可能性を示唆する[14)]。このheargは古英語において比較的頻繁に用いられていて，R. Jenteが用例を多数挙げている[15)]。この語は古英語の文献において‘grove’，‘temple’，‘idol’の意味で使用されているが，‘grove’の意味ではglossesに数例と*Azarias* 110行に用いられており，‘temple’の意味ではglossesに多数用例があるほか，*Orosius*, S. 8, 17, S. 114, 2や*Beowulf* 3070行において用いられている。また，‘idol’の意味ではglossesおよび説教集における用例に加えて，古英詩*Daniel*の以下の箇所に見られる。

þa hie for þam cumble　　on cneowum sæton,
onhnigon to þam herige　　hæðne þeode,
wurðedon wihgyld,　　ne wiston wræstran ræd,

efndon unrihtdom,　　swa hyra aldor dyde,
mane gemenged,　　mode gefrecnod.　　(*Daniel*, ll. 180–184)

Then they got down on their knees in front of the idol; the heathen bowed to the idol and worshipped it. They did not know superior wisdom. They committed a sin, as their lord did, polluted by evil deeds, filled with arrogance.

ここでは，hearg は‘idol’を表しており，ここにおける異教徒への言及と *Beowulf* 175行以降の描写には類似性が指摘されている。複合語としては herig-weard ‘a guardian of a temple’ が *Andreas* 1126行で使用されている。この hearg という語は異教の習慣について述べる際に用いられることが多く，しばしば‘heathen’という訳語が加えられているのはこのためであると考えられる。

冒頭で引用した *Beowulf* 175行以降で hærgtræf の直後には wigweorþung という複合語が用いられている。この単語の第一要素 wig は異教，キリスト教両方の文脈で‘idol’を表し，第二要素の weorþung は‘honour’を意味し，全体で‘honor to idols’あるいは‘homage to idols’という訳語で *Beowulf* の各エディション，訳においてほぼ一致している。第一要素の wig はゲルマン祖語で聖なるものを表す *wiha- に由来し，この *wiha- はルーマニアの Pietroassa で発見された指輪に表意文字としてのルーン文字による用例が見られるが，古英語の文献では‘idol’の意味に限定されている[16]。この wigweorþung が表しているのは Bede も *HE*, Book1, XXX で言及している「生贄」であると考えられ，そのような異教神への捧げものはアングロサクソン人のキリスト教への改宗後も一般的だったようである。Kent 王 Wihtred による7世紀後半の法典には，「夫が妻に知らせることなく，悪魔への捧げものをしたときは，全財産による賠償または処罰代償金支払いの責を負う。夫および妻の双方が悪魔への捧げものをしたときは，処罰代償金または全財産による賠償の責を負う[17]。」という規定が見られる。この wigweorþung の意味を考慮するならば，*Beowulf* 175行 hærgtræf の hærg も異教神への捧げ物という文脈を想定し‘idol’という訳語を与えるのが適切であると思われる。ここでは異教徒の習慣としての idol-worship が強調されているといえる。

一方 hærgtræf の第二要素である træf は使用例が少ない単語で，韻文では単独で用いられているのは2作品における4例のみである。この単語には一般的に‘building, pavilion, tent’といった訳語が与えられる。F. Holthausen はこの単語を借用語としており，語源としてラテン語 trab-s ‘Balken’を，また同系語として古フリージア語 tref ‘Hütte, Zelt’を挙げている[18]。詩における用例のうち，*Andreas* 842行で用いられている tigelfagan trafu は異教の町の‘tiled constructions’を持った建物を指していると考えられる[19]。*Judith* 43行，255行，268行の3箇所は，すべて Assyria の将軍 Holofernes の寝所である‘pavilion’を指しており，ラテン語の tabernaculum に対応して「テント状の建物」を意味している。複合語としては *Beowulf* 175行の hærgtræf 以外には，*Andreas* 1691行 の helltræf ‘hellish ie. heathen temple’ と *Elene* 926行 の weargtræf ‘dwelling of the

damned' が記録されているのみである。用例から判断すると，træf は時には異教のコノテーションを伴い，通常と異なる外観あるいは構造を持つ建物を表すのにしばしば用いられる語であるといえる。

このようにtræf は用例が少ない語であるのだが，*Beowulf* 175行において詩人がこの単語を用いた意図は異教時代の崇拝場所の発展を考慮することによって明らかになる。Tacitus の *Germania* にはゲルマン人の信仰に関する章があり，そこには以下のような記述が見られる。

> ceterum nec cohibere parietibus deos neque in ullam humani oris speciem adsimulare ex nemora consecrant deorumque nominibus appellant secretum illud, quod sola reverential vident.
>
> [*Germania*, 9]

> Apart from this they deem it incompatible with the majesty of the heavenly host to confine the gods within walls, or to mould them into any likeness of the human face: they consecrate groves and coppices, and they give the divine names to that mysterious something which is visible only to the eyes of faith.[20)]

ここではゲルマン人は元来いわゆる神殿のような神を崇める建物を作らなかったことが言及されている。ゲルマン人の崇拝場所に関する証拠は非常に少ないが，考古学的証拠および文学の証拠はゲルマン人の神聖な場所が自然の地形にあることを示しており，Tacitus の時代には建物は役割がなかっただろうと考えられている[21)]。また，引用箇所にあるように，ゲルマン地域の宗教活動がしばしば木や杭，柱，小山，丘などと関っていたことは地名の証拠によっても裏付けられる[22)]。

考古学の証拠によれば，時代が下るにつれて崇拝所としての建物を持たなかった初期の段階から次第に偶像を保護するようなテントあるいは覆いのようなものが作られていたことが明らかになっている。

> There were evidently two kinds of worshipping place. One, an ordinary building in a farm or home, used on special occasions for religious feasts. The other, away from the dwelling, 'need be more than the idols or sacred features themselves, which might in the course of time come to be protected by a tent or other temporary cover'. It is this latter type of temple that developed from the sacred grove and is perpetuated in the place-names we have mentioned.[23)]

上記の Bruce-Mitford が引用している Olaf Olsen によるデンマークでの異教の崇拝場所に関する調査は，初期の段階から進んで簡単な覆いで偶像を囲むようになったことを明らかにしており，これは崇拝場所の発達の中間段階であるといえる。

最終的にはキリスト教の影響もあり，偶像を入れた建物がおそらく作られていただろうことを

示す記述がBedeに見られる。

> Quid plura? praebuit palam adsensum evangelizanti beato Paulino rex, et abrenuntiata idolatria, fidem se Christi suscipere confessus est. Cumque a praefato pontifice sacrorum suorum quaerereret, quis araset fana idolorum cum septis quibus errant circumdata, primus profanare deberet; ille respondit: "Ego. Quis enim ea quae per stultitiam colui, nunc ad exemplum omnium aptius quam ipse per sapientiam mihi a Deo vero donatam destruam?" [*HE*, Book2, XIII]

> Why make a longer tale? The king openly gave consent to blessed Paulinus in his preaching of the Gospel, and renouncing idolatry declared that he received the faith of Christ. And demanding then of the aforesaid priest of his sacrifices, who should first profane the altars and temples with the grates wherewith they were environed: 'Marry,' replied he, 'I will. For who now to the good example of all men can better than I myself, by the wisdom given me by the true God, destroy those things which I have myself worshipped by foolishness?'[24)]

引用箇所はNorthumbria王Edwinの改宗について述べた箇所であるが，ここでは異教の祭壇と神殿の破壊が言及されている。また引用箇所以外にも，Gregory Iが布教のためイングランドに渡ったMellitusに宛てた手紙に「異教の偶像を収めた神殿が破壊されるのではなく偶像自体が破壊されるべきである」という異教の神殿に言及した有名な記述が見られる。

*Beowulf*の解釈における考古学の成果の援用はこれまでにしばしば行われてきており，この詩で描写されている異教文化に関する記述は少なからず考古学的に裏付けられている[25)]。例えば，ScyldやBeowulfの葬儀の記述，Heorotの描写，また武器や財宝の記述などである。異教の葬儀の記述に関しては，Uppsalaのburial moundsやVendel, Valsgärde, Sutton Hooのship burialの考古学的調査との対応が指摘されている。また，Heorotに関してはYeaveringが重要な証拠を提供している。6–7世紀のNorthumbriaにおける王の住居跡と考えられている場所より鉄の金具が発見されており，これは*Beowulf* 774行以降に見られる「それは内からも外からも鉄の帯でしっかり補強されていた」（ac he þæs fæste wæs innan ond utan irenbendum searoþoncum besmiþod (ll. 773b–775a)）というHeorotの描写と一致するものである。これらは*Beowulf*における異教文化に関する記述が単なる文学的な装飾ではなく現実に存在していたものを基にしているという裏付けがなされたという点において重要である。本稿で扱っている*Beowulf* 175行のtræfに関しても，すでに見た異教時代の崇拝場所の発展段階を考慮するならば，発展途中の崇拝所の外面的な構造[26)]を指すものだと考えることができる。テント状の簡易式の建物を意味するtræfという単語の選択は実際の崇拝場所の発展に即したものだといえるだろう。

以上で見てきたことから，冒頭の引用箇所におけるhærgtræfの第一要素hearg は‘idol’を意味し，第二要素træfはその‘idol’を覆うための‘tent’を意味しており，しっかりした建物ではない「簡易式の崇拝所」を表していると考えるのが適切である。現代英語のtempleは‘a

building devoted to the worship of a god or gods'[27] あるいは 'an edifice or place dedicated to the service or worship of a deity or deities'[28] の意味であり，しっかりした建築物というニュアンスがある。このため現代英語の 'temple' はここにおけるtræfの訳語としては厳密には適切ではないと思われる。引用箇所のhærgtrafumに対しては異教時代の崇拝所の外面構造を表現する 'idol-tent' などの語義が正確なものであるといえる。

冒頭で引用した*Beowulf* 175–83行は，詩の他の箇所に比べてキリスト教のトーンが強いことから一般的にChristian Excursusと呼ばれている。hæþenra hyht 'heathen's hope' という表現から分かるように*Beowulf* 175–83行ではDeneの人々は 'heathen' と呼ばれているのだが，この詩の中では他にはGrendelが同様に 'heathen' と呼ばれているだけである。このことからもここでは非難の意味がこめられているといえ，実際にこの箇所は詩の中で目立ってキリスト教色が強いという印象を受ける。そのため，かつてはこの箇所は後の時代のinterpolationだと考えられていた。しかしながら，ここがキリスト教色が強い唯一の箇所というわけではなく，しばしば指摘されるように*Beowulf* 3069行以降で竜が守る財宝にかけられた異教の呪いが言及されている部分も同様のトーンになっている。

Beowulf 175–83行は確かにキリスト教色が強く，記述は説教集におけるものと部分的に似通っている。

Nu alyse ic me sylfne wið god. and mid lufe eow for-beode.
þæt eower nan ne axie þurh ænigne wicce-cræft.
be ænigum ðinge. oðde be ænigre untrumnysse.
ne galdras ne sece. to gremigenne his scyppend.
forðan se ðe þys deð. se forlysð his christen-dom.
and bið þam hæðenum gelic. þe hleotað be him sylfum
mid ðæs deofles cræfte þe hi fordeð on ecnysse.
and butan he ælmyssan. and mycele dædbote
his scyppende geoffrige. æfre he bið forloren. (*Lives of Saints*, XVII 75–83)

'Now I deliver myself as regards God, and with love forbid you, that any of you should enquire through any witchcraft concerning anything, or concerning any sickness, or seek enchanters to anger his Creator; for he that doeth this, he letteth go his Christianity, and is like the heathen who cast lots concerning themselves by means of the devil's art, which will destroy them for ever; and unless he offer alms and much penance to his Creator, he shall be lost eternally.'[29]

上の引用はÆlfricによるもので，ここではwitchcraftによる占い行為をする者がlot-castingを行う異教徒と同じようであると非難されている。このように，説教集では異教の習慣はdeofles cræfte 'devil's art' などと表現され，þam hæðenum gelic 'like the heathen' という文句は強い叱

責に用いられるものである。ここで見られるような説教集のトーンに近いことから，*Beowulf* 175–83行には説教集の影響がはっきりと認められるとする意見もあり，例えばhæþenra hyht 'heathen's hope' などはその具体例として指摘される[30]。説教集やその他の散文においては，異教の崇拝場所はdeofol-gild，deofolgieldhus，tempel等の単語で表現されることが多い。しかしながら，詩人は*Beowulf* 175行で異教の崇拝場所を表現する際に，説教集に散見されるdeofol-gild，deofolgieldhus，tempel等の単語や他の古英詩に見られるealh，ealhstede，heahreced，temple，tempelhusといったような単語ではなく，他には用例がない複合語を用いていることは注目に値する。頭韻と直接関係していない第二要素としてのこの語の選択は意図的なものと考えられる。問題の箇所における詩人の単語の用い方を考慮すると，この箇所は全面的に説教集に拠ったもので詩人が実際の異教に関して具体的な知識がなかったということは考えにくい。既に見たように，使用されている単語は実際の異教の習慣に即したものなのである。

研究者の立場によりその扱いは異なるものの，*Beowulf*においてはキリスト教的要素あるいは異教的要素と考えられるものが混在している[31]。しばしば異教的要素と指摘されるものとしては，吉凶占いへの言及(l. 204)，火葬の描写(l. 1107 ff., l. 2124 ff., l. 3137 ff.)，頻繁に見られるwyrdやblood revengeへの言及およびworldly gloryの称賛，heroic codeが美徳とされていること，兜に付いた猪の像（l. 1112, l. 1328）やbeasts of battle（l. 3024 ff.）への言及があること，eoten 'giant' への言及がしばしば見られること等がある。一方，キリスト教的要素としては，カインとアベルへの言及(l. 106，l. 1261)，審判官としての神の概念(l. 181，l. 588)，最後の審判への暗示(l. 974)，悪魔の概念(l. 101，l. 756，l. 786，l. 788，l. 1680，l. 1682，l. 2088）等が挙げられる。

このように*Beowulf*には異教的要素とキリスト教的要素が混在しているわけだが，全体を通して登場人物に関してはその宗教的立場はほとんどの場合明確にされてはいない。詩人は宗教的にはっきりと書かないように配慮しているようであり，これは物語の時代背景から異教徒であるべき登場人物達がキリスト教の神を崇めているのはおかしいということと，一方異教の神々を崇めている登場人物を無条件で褒め称えるわけにもいかないという理由が関係しているのだろう[32]。*Beowulf* 175–83行のgastbona 'soul slayer' は異教神Odinを表すものと考えられているが，具体的な名前が挙げられることはない。同様に，古英詩全体でキリストを表すCristは主格および対格で58例，属格で40例，与格で34例用いられており，またマリアを表すMariaは格変化を含め18例が記録されているが[33]，*Beowulf*においては全く言及されていない。異教の習慣に言及しながら具体的な記述がなく詳細は述べられないのと同時に，キリスト教的な要素に関しても他の古英詩とは異なりはっきりとした記述は見られないのである。つまり詩人は異教に関して詳しいことは知らなかったというよりも，この詩に見られる曖昧さは異教的要素だけではなくキリスト教的要素にも見られる意図的なものであると考えられる。

本稿で扱った*Beowulf* 175–83行は，異教的な記述に対するキリスト教的な記述という枠組みではなく，詩人は宗教に関しては意図的にはっきりとした記述を与えていないという観点から考えられるべきである。この箇所は異教の崇拝所に関する記述ではあるが，具体的なことは述べられない。しかし，一方で用いられている単語は実際の異教の習慣に合ったものだといえる。詩人は

利用できただろうと考えられるsourcesも含めて異教とキリスト教どちらの知識も有していたが，詳細な記述を与えないようにしていたと考えるのが妥当である。

注

1）古英詩からの引用はすべてGeorge Phillip Krapp and Elliott van Kirk Dobbie, ed., *Anglo-Saxon Poetic Records*, 6vols.（New York: Columbia University Press, 1931–53）に拠った。

2）本稿における古英詩の現代英語訳は特に言及のない場合は筆者による。

3）T. Hofstra, L. A. J. R. Houwen and A. A. MacDonald, ed., *Pagans and Christians* (Groningen: Egbert Forsten, 1992), p. 23を参照。

4）苅部恒徳，小山良一編著『古英語叙事詩　ベーオウルフ　対訳版』東京，研究社，2007年，268頁。

5）Howell D. Chickering, *Beowulf*: *a Dual-language Edition* (New York: Anchor Books, 2006), p. 59.

6）Robert Kay Gordon, *Anglo-Saxon Poetry* (London: Dent, 1959), p. 6.

7）John Porter, *Beowulf* (Middlesex: Anglo-Saxon Books, 1993), p. 21.

8）A. J. Wyatt and R. W. Chambers, *Beowulf with the Finnsburg Fragment* (Cambridge: Cambridge University Press, 1925), p. 208.

9）C. L. Wrenn, ed., *Beowulf* (Exeter: University of Exeter, 1988), p. 247.

10）FR. Klaeber, ed., *Beowulf and the Fight at Finnsburg*, 3rd. ed. (Lexington: D. H. Heath and Company, 1950), p. 350.; Bruce Mitchell and Fred C. Robinson, *Beowulf*: *an Edition* (Oxford: Blackwell, 1998), p. 267.

11）Johannes Hoops, *Kommentar zum Beowulf* (Heidelberg: Carl Winter, 1965), p. 39.

12）*ASPR*, p. 126.

13）S. A. J. Bradley, *Anglo-Saxon Poetry*: *an Anthology of Old English Poems* (London: Dent, 1995), p. 416.

14）A. J. Wyatt and R. W. Chambers, p. 12を参照。

15）Richard Jente, *Die mythologischen Ausdrucke im altenglischen Wortschatz*: *eine kulturgeschichtlich-etymologische Untersuchung* (Heidelberg: Winter, 1921), pp. 9–11.

16）*wiha- に関してはJan de Vries, *Altgermanische Religionsgeschichte* (Berlin: W. de Gruyter, 1970), p. 341を参照。

17）大沢一雄『アングロ・サクソン法典』東京，朝日出版，2010年，96頁。

18）F. Holthausen, *Altenglisches Etymologisches Wörterbuch* (Heidelberg: Carl Winter, 1963), p. 352.

19）Mark Griffith, *Judith* (Exeter: University of Exeter Press, 2001), p. 115.

20）*Germania*の原文および訳は*Tacitus*, *Agricola, Germania, and Dialogus*, trans. M. Hutton and W. Peterson, rev. by R. M. Ogilvie, E. H. Warmington and M. Winterbottom, Loeb Classical Library（Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press, 1970）に拠った。

21）*Tacitus Germania*, trans. J. B. Rives (Oxford: Clarendon press, 1999), pp. 163–164.

22）David Griffiths, ed., *Anglo-Saxon Studies in Archaeology and History* 8 (Oxford: Oxford University Committee for Archaeology, 1995), pp. 1–2.

23）Rupert Bruce-Mitford, *Aspects of Anglo-Saxon Archaeology*: *Sutton Hoo and Other Discoveries* (London: Victor Gollancz, 1974), p. 88.

24）*Eccles. Hist.* の原文および訳はBede, *Ecclesiastical History of the English Nation*, trans. J. E. King, Vol. 1（Cambridge: Harvard University Press, 1930）に拠った。

25）*Beowulf*と考古学の関連についてはBjork, Robert E. and John D. Niles ed., *A Beowulf Handbook* (Nebraska:

University of Nebraska Press, 1998), pp. 291–310を参照。

26）Gale R. Owen, *Rites and Religions of the Anglo-Saxons* (New York: Dorset Press, 1985), p. 42.

27）*Oxford Dictionary of English* (Oxford: Oxford University Press, 2005), p. 1815.

28）*Webster's New Universal Unabridged Dictionary* (New York: Barns & Noble, 1996), p. 1954.

29）*Lives of Saints* の原文および訳はWalter W. Skeat, *Ælfric's Lives of Saints*: *being a Set of Sermons on Saints' Days formerly observed by the English Church*（London: N. Trübner, 1881）に拠った。

30）Andy Orchard, *A Critical Companion to 'Beowulf'* (Cambridge: D. S. Brewer, 2003), pp. 151–52.

31）*Beowulf* における異教的要素およびキリスト教的要素に関しては，*Pagans and Christians*, p. 21, Klaeber, pp. xlviii-li, Karl Schneider, *Sophia Lectures on Beowulf*, eds. Shoichi Watanabe and Norio Tsuchiya (Tokyo: Taishukan, 1986), p. 78を参照。

32）唐沢一友『アングロ・サクソン文学史：韻文編』東京，東信堂，2004年，116–17頁；Fred C. Robinson, *Beowulf and the Appositive Style*（Knoxville: University of Tennessee Press, 1985）を参照。

33）J. B. Bessinger, Jr. and P. H. Smith, Jr. with M. W. Twomey, ed., *A Concordance to 'The Anglo-Saxon Poetic Records'* (Ithaca: Cornell UP, 1978).